様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月２０日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：２１７２０１１２
研究課題名（和文）　フランス１９世紀文学における愚者像についての研究

研究課題名（英文）　A Study on Stupid Characters in 19th-Century French Literature

研究代表者
東　辰之介（AZUMA TATSUNOSUKE）
駒澤大学・総合教育研究部・講師
研究者番号：００５０８９０５

研究成果の概要（和文）：フランス 19 世紀文学における愚者は、社会的価値観への盲従によってバランスのとれた思考能力を失ってしまった愚者と、逆に社会のルールを守る能力がないか、あるいはそれをあえて拒絶する変わり者としての愚者に大別される。フランス 19 世紀文学の基本スタイルは前者を風刺し、後者を普遍的真実を明るみに出す存在として描き出す点にあるが、二種類の愚者を奇妙に結合したようなきわめて印象深い登場人物もまた生み出している。

研究成果の概要（英文）：Stupid characters in 19th-century French literature can be divided into two types: those whose blind obedience to socially accepted ideas has eroded their faculty for sane thought, and those who are often considered eccentric due to their inability or unwillingness to obey social rules. In general, 19th-century French literature satirizes the former, and depicts the latter as representing or bringing to light a universal truth. However, some impressive characters are able to strangely combine the two types.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００９年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| ２０１０年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,900,000 | 570,000 | 2,470,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：仏文学・19 世紀・愚者

１．研究開始当初の背景

フランス哲学の研究者ミシェル・アダンは、『愚かさについての試論』において、「愚かさ」とは何かという問いに答えようとしている（Michel Adam, Essai sur la bêtise, édition augmentée, La Table Ronde, 2004）。それによれば、「愚かさ」というテーマは、哲学の分野では最近まで断片的に言及されるばかりで、オルテガ・イ・ガセットが『大衆の反逆』（1930）の中でこのテーマに関する専門的な研究の不在を嘆いて以来、バシュラール、ドゥルーズらによって若干の考察がなされたものの、まとまった論考は出されておらず、『愚かさについての試論』こそがそうした試みの嚆矢であるとのことである。本書は文学作品を大量に引用しており、その限りにおいて本研究の先行研究と呼び得る。ただし、著者の意図は主として「愚かさ」の種

類を同定し、分類して列挙することにあり、書かれた時代や社会的文脈、作家の個人的資質などを考慮しながらテクストを解釈する文学研究のスタンスからすると、やや表面的な分析との印象を受ける。

また、フランス 19 世紀文学にコーパスを限ってみると、行動的で現実的なブルジョワ階級が社会の中心を占めていった時代を背景に、数々の愚者を執拗に描いた小説家フロベールについて、本研究とテーマの重なる専門研究書が存在する（Alain de Lattre, La Bêtise d’Emma Bovary, José Corti, 1980）。登場人物それぞれが異なる「愚かさ」を体現していると述べて、その特質を明らかにする手法は手堅く、作品論ゆえの限界はあるにせよ参考にすべき点が多い。

一方、国内のフランス文学研究者が、フランス 19 世紀の作品に関して愚者像というテーマで論じたものは特に見当たらないが、他分野では興味深い論考もある。たとえば、哲学研究者の岡部勉氏はその著作（『合理的とはどういうことか―愚かさと弱さの哲学』講談社、2007）で、規則とか規範を意識して、自分の愚かさと弱さを嘆くのは人間だけであり、動物はそのようなことはしないと述べ、愚かさが人間性と切っても切れない資質であると考えている。

このような状況の下、研究代表者はバルザックについて短い論考をひとつ発表していた（「バルザックにおける「愚かさ」の問題―『ゴリオ爺さん』から『現代史の裏面』へ」、『仏語仏文学研究』第 31 号、東京大学仏語仏文学研究会、2005 年）。これは後に、研究代表者の課程博士論文「バルザックの作品における「脳」と「知能」の問題」（東京大学、2006 年）の一部になったが、本研究の端緒でもある。ここでは、社会が複雑化するにつれて分業と専門化が進み、長時間の反復的活動のせいで近代人は常に愚鈍化する危険にさらされているという視点から論を進めたが、まだバルザックにおける愚者像について論ずべきことは山積していると断言できる。

以上をまとめると、フランス 19 世紀文学における愚者像は、フランスの哲学者や文学研究者の興味の対象となっており、今後日本での関心が高まることが期待されるテーマである。本研究の第一の意義は、こうした状況に応えて、バルザックについての専門知を足がかりにしつつ、世紀全体についてのバランスの取れた理解を目指す点に見出される。

## ２．研究の目的

古来、愚者は文学に必須の存在であった。愚者は、ある時は合理性だけでは説明のつかない人間存在を不合理性の側から逆照射してくれる魅力的な存在として描かれ、またある時は周囲の人々を不快にする社会的規範からの逸脱者として辛辣な批判の対象となり、またある時には（人間はだれも愚者たりうるという可能性ゆえに）その不幸に関して真摯な同情が注がれもする。とりわけヨーロッパでは、人間を理性的存在と規定する哲学の伝統が、現実世界には溢れんばかりに存在する人間の愚行に対して根本的な思索を先送りにする傾向があったがゆえに、あたかもその欠落を補うようにして、文学はありとあらゆる愚行を人間理解の重要な一面として収集・解釈し、結果として多くの愚者像を創造してきたように思われる。

本研究は、このヨーロッパ文学における愚者像という大きな研究の一隅を占めるべく、フランス 19 世紀文学、とりわけ広義のロマン主義、写実主義、自然主義に属する小説・戯曲作品における愚者像を収集し、そこで賭けられているものを比較検討しつつ、通時的・共時的に全体的な知見を獲得することを目的とする。フランス革命によってアンシャン・レジームを脱却し、幾度も政体の変転を経験しながら徐々に大衆社会の成立へと向かったフランス 19 世紀は、必然的に愚者とは誰かという問いに対する作家の返答も多様化した時代であり、この時代に生み出された文学は、研究対象として極めて優先順位が高い。

フランス 19 世紀文学における愚者像研究に課せられる最大の課題は、研究結果をフランスあるいは日本において刊行物の形で公表し、関心を共有する研究者と連携をとって同時代の文学研究を推進しつつ、他地域・別時代の文学研究にも刺激を与えることにあるが、当面の目標は、愚者のテーマに関わる作品リストを作成して公表し、学会発表などの場を通じて作品解釈や作家論を積み上げ、国内における 19 世紀の人文学研究全般に寄与することにある。愚者のテーマは歴史上多くの文学作品に認められるのだが、これまでは哲学者が自らの理論形成のために引用して分析することや、文学研究者が作家研究の枠内で部分的に論じることはあったものの、いまだ総合的な視点に立って研究が行われているとは言えない。本研究はこうした状況に風穴を開けると同時に、来るべき議論の共通基盤を整備することを目指している。なお、愚者というテーマは決して文学固有の問題ではなく、誰しも日常的に自己や他者を愚かだと思って落胆や憤慨を覚える時があるだろうと想像されるので、研究成果を発信することによって、将来的に広く社会一般の関心を文学や文学研究に引き付ける機運を高めることが可能になると思われる。

## ３．研究の方法

第一に、研究に準備的段階を設けて研究対象の軽重づけを正しく行うことが必要であ

る。具体的には、文学研究という学問的枠組みや、フランス 19 世紀という言語的・時代的限定をいったんはずして、愚者や人間の愚かさについての種々の言説を収集し、どのような問題設定がありうるかについて予備的考察を行う。その際には、百科事典、資料集、各種コンコルダンス、イギリス、ドイツ、イタリア、ロシアなどヨーロッパ各国の文学史、哲学、人類学、社会学等を活用する。

その上で、フランス 19 世紀文学の小説家、戯曲家たちの作品のうち、詳細な分析に値する作品を 20 から 30 作品程度選び出す（研究代表者がこれまで専門に研究してきたバルザックについては、その全作品を念頭に置く）。ただし、その選択に妥当性を持たせるためにも、なるべく多くのフランス文学史や作家論を読破し、重大な遺漏のないように努める。もちろん、詳細な分析をすぐに実施しないまでも、本研究の発展に少しでも資すると思われるものは文献リストに加え、将来の研究継続に対する備えを怠らないようにする。

第二に、膨大なテクストから研究に有益な箇所を適切に探り当てるために、コンピュータの検索機能を十分に活用することが重要である。現在、フランス国立図書館は Gallica という電子図書館をインターネット上に公開しており、フランス 19 世紀文学についても多くの作品が電子化されている。また、バルザックについては、埼玉大学名誉教授の霧生和夫氏が作成した電子コンコルダンスが存在し、現在ではパリ所在の Maison de Balzac のサイトから検索可能になっている。これらの電子媒体の積極的活用は、本研究の効率的遂行のために欠かせないと考えられる。ただし、たとえ検索語をいろいろ増やしてみても、最終的には作品を通読しないと見つからないような重要箇所もおそらく存在するので、検索の結果はあくまで限定的な手段として用い、あまり過信しないようにする。

第三に、フランス本国に出張し、研究のスムーズな進捗のために、図書館で集中的な文献調査をする必要がある。フランス国立図書館は、電子化されていない所蔵本について、コピー郵送サービスを有料で実施しているが、この方法にすべてを頼ることはできない。数週間待った後、届いたコピーを読んだら、研究の役にはあまりたたないと判明するということが大いにあり得るからである。現地に行って、実物を数多く閲覧し、コピーあるいは購入すべきものを、その場で決定した方が、結局のところずっと生産的である。フランス滞在の際には、種々のシンポジウムや講演会などに積極的に参加し、人文系の著作を扱う書店を巡ることで、研究に有用なヒントを数多く集めるようにする。

４．研究成果

本研究では、フランス 19 世紀文学における愚者像を比較検討し、その特質について全体的な知見を獲得することを目指した。そのためにはまず「愚者」の定義が必要になるが、ルネサンス以降の西洋に限って言えば、エラスムスの「狂気」、フローベールの「愚鈍」、ドストエフスキーの「白痴」という三つの概念が、互いに対立する契機をはらみつつも、「愚者」の周辺で一つの大きな問題系を成していることが分かった。

しかしながら研究を進めるうち、フランス 19 世紀文学を含む近代文学において、「狂気 folie」は「天才」のテーマに関わることの方が多く、本研究のキーワードとしては周縁的なものにすぎないことが判明した。そして残った「愚鈍・愚劣」を意味する bêtise と「白痴」を意味する idiotie が、あたかも楕円の焦点のように、「愚者」という問題系の二つの中心として浮かび上がった。この二つの概念の関係は、フランス人にとっても自明ではなく、日常的には同義語として使われさえもするが、哲学者や文学者はむしろ反意語として理解・使用する傾向を強めている。

この対立関係をとらえるには、「愚者」と社会の関係を考えると分かりやすい。すなわち、世間一般や職業集団等が正当と認める価値観に盲従することで、個人としての思考・反省能力を著しく損なってしまった「愚者」には bêtise という概念が適用されるのに対して、社会が要求する「正しい」考え方や振る舞いを受け入れる能力がないか、敢えてそれらを拒絶する変わり者である「愚者」には idiotie という概念が適用されるのである。そしてもちろん、近代文学の基本的スタイルは前者の「愚者」を風刺し、後者の「愚者」を普遍的な真実を明るみに出す存在として評価する点にある。前者の例としては、アンリ・モニエが創造した俗物ジョゼフ・プリュドム、後者の例としては、（議論の余地はあるだろうが）ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』の鐘つき男カジモドなどが挙げられる。

しかしながら、文学史上「愚者」として有名な登場人物の特徴を分析してみると、必ずしも二種類の愚者に分類できるわけでないことに気づかされる。例えば、19 世紀前半のバルザック『ゴリオ爺さん』の主人公は「愚者」の典型として有名であるが、前者の「愚者」をベースとしつつも後者の「愚者」の性質を兼ね備えた複雑な存在である。ゴリオにおいては、単調な職業生活や物質主義に由来する精神硬直状態と、激しい感情の結果としての心身消耗状態が、どちらも見かけ上は同じ愚かさを生み出している。「愚鈍・愚劣 bêtise」と「白痴 idiotie」の両概念を、一身に統合したような半ば怪物的な人物がゴリオなのである。

これらの研究成果をふまえ、19 世紀後半の文学作品、とりわけフローベールの作品における愚者像研究に着手した。フローベールは自身を後者の「愚者」の立場に置いて、前者の「愚者」を風刺・攻撃するという基本的スタンスに立ちながらも、自らのうちにも風刺されるべき前者の「愚者」がいることに自覚的であった。このため、『ブヴァールとペキュシェ』、『紋切型辞典』といった風刺文学の枠から大きく逸脱した異色の作品が生み出されたものと考えられる。詳細な分析はこれからであるが、そのために必要な基盤づくりは本研究によって達成できたものと考える。引き続き調査・研究のさらなる精密化と成果公表に努めていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 東辰之介、バルザックにおける愚者像―狂気・愚鈍・白痴、駒澤大学外国語論集、9 号、97－137 頁、2010 年、査読なし

〔その他〕
ホームページ等
駒澤大学図書館駒大電子紀要検索
http://wwwelib.komazawa-u.ac.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
東　辰之介（AZUMA TATSUNOSUKE）
駒澤大学・総合教育研究部・講師
研究者番号：００５０８９０５